

## 芳賀矢一『留学日誌』

— 東京大学国文学研究室蔵本の影印と翻刻 —

長島 弘明

明治三十三年（一九〇〇）九月八日、数え年三十四歳の

芳賀矢一はドイツ船籍のプロイセン号で、横浜からドイツ留学に出発した。この頃、東京帝国大学文科助教授（国語学国文学国史第四講座担当）であった芳賀は、同年六月十二日付で、文部省から「文学史攷究法研究」のため満一年の留学の辞令を受けているが、実際に日本に戻ったのは、ほとんど満二年後の明治三十五年八月二十四日である。出発日をもって、国語学国文学国史第四講座担当は一旦免じられている。芳賀と一緒にこの船で欧州留学に向かったのは、英文学の夏目金之助（漱石）、ドイツ文学の藤代禎輔、農学の稲垣乙丙、医学の戸塚機知である。一緒に行くはずだった美学の高山林次郎（樗牛）は、出発直前の病で留学を断念している。漱石はイギリスへの留学であるが、パリ

まで芳賀らと同行している。

この芳賀のドイツ留学が、近代国文学研究の成立に大きな意味を持つことが、従来くり返し指摘されている。この留学以前に、芳賀はすでにドイツ文献学の方法に触れ、大きな影響を受けているが（長島編『国語国文学研究の成立』、放送大学教育振興会、二〇一一年）、それでも、江戸時代の国学の血脈を引いた国文学研究を、国民性を明らかにするための日本の文献学としてはつきりと自覚するためには、やはりこの留学が不可欠であった。その意味では、この留学は近代国文学研究誕生に向けての旅だったのである。

その芳賀が、留学中に日記を残している。行きは横浜出港の明治三十三年九月八日から始まり、ドイツでの滞在中も書き続けられ、帰りは明治三十五年八月二十四日横浜入

港の少し前、明治三十五年八月十二日まで記されている（ちなみに、日本出発までの明治三十三年の日記、詳しく言えば、明治三十三年一月一日から九月七日までの日記も書かれている）。

この留学中の日記は複数冊にわたるが、『留学日誌』の総称で呼ばれることが多い。東京大学国文学研究室が所蔵する『留学日誌』は、黒布貼り表紙の横長の手帖で、出発日の明治三十三年九月八日から、十月二十九日のベルリン到着を経て、十一月三日までの分が記されている。携帯に便利なためか小型の手帖なので、米粒大の小さな字が細ペンでぎつちり書かれている。やや乱雑な筆致の所もごくわずかながらあるが、ほとんどは丁寧で謹直な筆運びである。

この手帖、すなわち東大本の『留学日誌』は、芳賀没後満十年目に当たる昭和十二年二月六日（二月六日が祥月命日）刊の『芳賀矢一文集』（富山房）等に翻刻され、また比較的近年の『芳賀矢一選集』（芳賀矢一選集編集委員会編、国学院大学発行）第七卷「雑編・資料編」（平成四年五月刊）にも収録されているが、手帖原本と若干異なるところがある。原本の誤字の補正、あるいは翻刻文自体の誤植によって生じた違い以外にも、別の理由で本文の違いが生まれている。

一つ目は、この『留学日誌』の書き出しの部分。九月八日の出航の前、六月くらいから、芳賀を送別する様々な会

が開かれたことが記されているが、開催の月日の部分は、後の翻刻を御覧いただければわかるように、おむね最初は空欄で、後に鉛筆書きで記入されている。これは手帖を書き始めた時点（横浜出航後か）では、手元にそれらの送別会の月日を確かめる資料がなく、恐らくは帰国後にでもそれを補記したものであろう。その『留学日誌』冒頭に記される送別会の中で、「国語伝習所の主張したる知友一般の送別」の日付は、「八月六日」とペンで記されているが、『芳賀矢一文集』では「九月二日」となっている。これは、芳賀の別の日記（明治三十三年の正月から九月七日までの日記）を見るに、「九月二日」が正しいようである。また、「福井会の中心となれる同郷人の会合は」の後は数字分空白のままになっており、その後に「を以て精養軒に催したり」と続いている。この数字分の空白は『芳賀矢一文集』では「九月一日」となっている。この二箇所は、芳賀が原本に加筆修正しなかった（あるいはし忘れた）のを、翻刻の際にでも、訂正したものであろう。

二つ目は、『芳賀矢一文集』等の翻刻者・編纂者の配慮が働いて、日記本文の一部が削られたり、あるいは語句が差し替えられたりしている所である。それは、芳賀が外国で出会った日本人の娼婦に関する記述であり、ポンペイの遺

跡から発掘された春画、あるいはその種の彫刻についての記述であり、また皇室に関する記述である。編纂者がわざわざ省いたものを指摘するのは、余計なお節介に類する行為かとも思うが、『芳賀矢一文集』が刊行された昭和十年代はともかく、今日では省略する必要がない箇所と思われるので、次に掲げておく。

まず、九月十九日の条。香港に着いた芳賀らは、旅館の客引きに連れられて、日本人経営の鶴屋に行く。ところが階段は急峻、部屋は汚い。そこに「日本婦人二、三、宿泊せり」と記すが、その後に原本では、「醜業婦の類にや」という言葉がある。

また、九月二十五日の条。シンガポールで、植物園、博物館を見て回った芳賀らは、日本人経営の宿屋に入るが、その宿屋の近くにも日本人娼婦がいる。「旅館の周囲には、日本の娼婦多し。三々五々、細帯にて往復する様、如何にも見苦しくおもはる」ということが翻刻では省かれている。

十月十八日の条。ナポリに上陸した芳賀は、博物館でポンペイの遺跡の出土品を見る。芳賀は装飾品等の豪華さに感心しているが、そこにある、「又一室には特に春画、及び同様の彫刻物等を蔵む。背面攻撃をなすもの、三、四葉を

見受けたり。又悪魔の山羊を犯す置物あり。驢馬の獅子を犯して、金冠を得る絵あり。陽物の形、非常に大なるもの、壁間にか、れり。又四、五人の陽物にて、大なる器物を支ふる様に作れる置物もあり。おもひ切った作り物、実に多し」という記述は、そっくり削られている。

同じく、十月十八日の条。ナポリの博物館から出て、王宮を観光した芳賀は、その建物の豪壮美麗の様に驚嘆し、次のように続けている。「室内の模様は我が皇室に同じけれども、間数の多きは遙に我皇室にまさりたるべく、裝飾亦美麗にして、燦爛目を奪ふ。舞蹈室、芝居舞台等もあり。全体、大理石の建物にして、庭園の美こそなければ、巍然たる輪奐、到底我皇室の及ぶところに非ず。恐れ多き事ながら、我皇室の今少しく大規模に壮大なる建築にてあらばやなど、坐に慷慨の心を生ず」。この部分が落ちていたのは、もちろん皇室への配慮からである。

同じ配慮としては、この『留学日誌』に記されている最終日の十一月三日の条である。この日の日記は、「我が皇の天長節日、ことに麗なり」で始まるが、「我が皇」は、『芳賀矢一文集』では「我が国」に改まっている。直接、天皇を指すことばを避けたものであろう。

以上のような箇所の、省略のない形で紹介は、今回が

初めてかと思われる。

芳賀とともに太平洋を渡り、スエズ運河を経て欧州に入り、かの地の文華とふれあい、芳賀とともに帰朝した手帖であるが、その後の手帖の行方について触れておく。手帖末尾の遊紙に記された新村出の識語によれば明らかであるが、芳賀の帰朝から約五年後の明治四十年三月、後に広辞苑の編集で著名になる新村出がドイツ留学に旅立つことになった。まだ欧州の旅行案内書なども無い時代である。芳賀は新村に、遊学の参考にせよとこの手帖を譲った。昭和十二年刊の『芳賀矢一文集』の例言には、この手帖が現在は新村の所蔵であり、新村から借覧してここに収めることができたこと、芳賀檀（矢一息男）が感謝とともに記している。その手帖が、数年後に東京大学国文学研究室に寄贈されたわけである。ただし、新村の識語には「昭和十五年九月二十二日」とあり、一方、見返しの次の遊紙表に記されている寄贈印の受入日は、「昭和拾六年九月拾九日」となっている。識語、受け入れ印の日付が両者ともに正しいとすれば、識語から受け入れまでに一年近くかかっていることになる。

今回、この手帖の影印と翻刻を試みたのは、従来の翻刻に省略された部分があったということも理由の一つである

が、長年の間に手帖の綴じ糸が切れたりして現在危うい状態になっており、現時点で影印にしておきたいということが大きな理由である。この手帖に対して示された新村出の敬意が、今後とも引き継がれていくことを祈りたい。

なお、東京大学国文学研究室には、この手帖の他、芳賀が種々の書物から抜き書きした十六歳の時の『明治十五年雑記』や、『芳賀矢一雑記』があり、また昭和十二年に東京大学で開かれた展覧会「芳賀先生記念展観 源氏物語等芳賀先生関係文献」の参会者名簿、没後満十年の昭和十二年二月六日の会の出席者名簿、芳賀先生を偲ぶ会の記録・名簿（昭和十三年二月六日、十四年二月六日、十五年二月六日、十六年二月八日、十七年二月七日、十八年二月六日、十九年二月六日等）がある。

この手帳の書誌を記しておく。

一、表紙 黒の布表紙。縦八・五センチ×横一三・五センチ（厚さは〇・八センチ）。

一、構成・頁数 見返しは薄茶色の紙、次に見返しと同じ紙質の（前）遊紙が一枚、その次に本文が全百十頁（紙数でいえば五十五枚）、最後に（後）遊紙が一枚。最初の一頁目と二頁目（本文の第一枚目の紙の表裏）は白紙（ただし、二頁目には、鉛筆で、「第一高等学校職員送別会／七月二十四日」という鉛筆のメモがある）。通し頁の三頁からが、実質的な日誌本文である。また、五十九頁以降は白紙。その後半の白紙のうち、百六頁にはドナルド・ジョン・マクドナルドの住所が（住所は、イギリスのスコットランドにあるインヴァネスシャーアのドラムナドロヒトのもの）、百八頁には同時期に留学中とおぼしい知人四人の住所が（住所は、姉崎がデンマークに近いドイツのキールのヴェイルヘルミーネンシュトラッセ、松本と倉出がベルリンのクラーフェルステンシュトラッセ、西山がベルリンのリュッツォブラッツのレツラフ夫人気付）、百十頁には聴講予定の時間割らしいものがある。それぞれメモされている（百六頁と百八頁の筆跡は異なる。また百八頁の中でも複数の筆跡が混在するか）。また、（後）遊紙の裏側には新村出の識語がある。影印と翻刻

を参照されたい。なお、手帖の三方の小口は赤色。

一、行数 一頁あたり十九〜二十五行ほど。

一、字数 一行当たり、十一〜二十二字ほど。

一、使用インク ブルーブラック。ただし、黒に近いものから、青に近いものまで、数種類が使われている。

一、袋・箱 手帳は、現在、茶封筒に入れられ、さらにそれが桐箱に入れられている。茶封筒は、縦一四・八センチ×横九・七センチ。茶封筒表に毛筆で、「新村先生御所蔵／芳賀博士／日誌」（筆者不明、裏にやはり毛筆で、「昭和十年 月（？）／富山房／芳賀博士記念展 観／二出品／新村出」（新村出筆）とあり。箱は、縦一七・二センチ×横一四・〇センチ×厚さ二・六センチ。

一、印記等 「東京帝／国大学／図書印」（朱、見返し上部）、「国文」（朱、横書、見返し左下）、「1388」〔青、見返し中央下〕。「寄贈／昭和拾六年九月拾九日／新村出氏」〔黒ゴム印およびペン記入、（前）遊紙の表の左上〕。「東京大学図書」（黒、丸印、五十八頁左下）。

なお、百六、百八頁のメモの読みと住所の特定、及び筆跡については、東京大学名誉教授の松浦純氏のご教示にあずかった。心より御礼申し上げます。

以下は翻刻の凡例である。今日の人権意識からして不適切な表現があるが、歴史的な価値に鑑み、そのまま翻刻に付した。

#### 凡例

読みやすさに配慮して、翻刻は次のようにした。

- 一、漢字は、原則、新字体とした。
- 一、原文には、ごくわずかの箇所濁点、読点等があるだけなので、濁点、句読点を新たに補った。
- 一、明らかな誤字については、ママを付した。
- 一、最初空欄で、後に鉛筆で補記された箇所については、六月廿四日〔廿四〕は鉛筆補記）  
などとした。
- 一、抹消箇所については、  
高等師範学校国語漢文専修科生徒（二字抹消）  
などとした。
- 一、書直しの箇所については、  
壇浦何（「那」と改）  
などとした。
- 一、改行は原文に従っていない。
- 一、原本で頁が改まる箇所は、

#### 「三頁」

などとし、次行を一行あけた。（）内に記した頁数は、通し頁数である。

一、日にちの変わる所は一行あけた。ただし、日にちが変わる所が、改段、改頁となっている場合は、この限りではない。

一、最低限の説明が必要な場合、（）で囲んで注記を施した箇所がある。

翻刻の後ろに収録した原本の影印について一言しておく。各図の下にある算用数字は、通し頁数である。翻刻の（）内に漢数字で記した頁数と対応している。

第一高等学校職員送別会／七月二十四日（二頁〔通し頁数〕、以下同じ。ここは鉛筆書きメモ）

明治三十三年六月十三日、文部大臣より独国留学の命を受け、九月八日を以て出発と定む。同行を約するもの、藤代禎輔、夏目金之助、稲垣乙丙、皆年来の知友たり。出発に先ち、知友学弟等、送別の会を開くもの頗多し。就中、国学者の同友は、箱根塔沢に会して余が行を送る事、六月三十日〔六〕と「三十日」は、最初空白であったのを後から鉛筆で補記）に在り。大学国文科の学生は、六月廿四日〔六二〕廿四〕は鉛筆補記）長舵亭に、越えて七月二日〔七月二〕は鉛筆補記）、高等師範学校国語漢文専修科生徒、（二字抹消）卒業生も、亦同処に別宴を開けり。富山房の招宴は、八月廿七日〔八〕「廿七」は鉛筆補記）上野松源支店に、国語伝習所の主張したる知友一般の送別は、八月六日〔芳賀矢一文集〕では「九月二日」神田開花楼に開かれたり。大学国文科卒業生の学士、及大学同年卒業生の旧友会は、七月廿五日〔七〕「廿五」は鉛筆補記）を以て学士会事務所を開會、福井会を中心となる同郷人の会合は、（数字分空白、後の『芳賀矢一文集』では「九月一日」と記載）を以て精養軒に催したり。其他、親戚知友の少数を以て惜別の会を開きたるもの、

枚挙に暇あらず。六月以後出発にいたる迄、概ね虚日なし。餞別の物品を寄贈し来れるもの、亦甚だ多し。交情の懇篤なる感激、」（三頁）

何ぞ堪へむ。其他、留學生一般のために大学教授の催されたる会合の如きも、亦一にして足らず。浅学菲才を以て留学の榮を受けたるだにあるに、更に重ぬるに、この厚遇を以てす。いよ／＼責任の大なるをおもひては、奮励以て国文学前途の為に尽さんとする念は、一層あつし。九月八日出発にいたり、医学士戸塚機知君の同行せらるゝ事と成りたるは、更に喜ぶべき事たり。高山林次郎氏が不慮の病痾に犯されて、同行を果さざりしは、同君の爲めに悲むべきは勿論、一行の最遺憾とするところなりき。

九月八日 味爽、結束してして家をいづ。之よりさき古郡幸介、高橋儀一、山根勇藏、佐村八郎の諸氏早く余が寓に來り、余が旅装の成るを待つ。家をいづる時、残月天に在り。車を連ねて新橋にいたる。同行の諸氏、亦踵いで到る。知友等の停車場に送るもの、百人を超ゆ。更に汽車に搭じて横浜に見送りたるもの、亦三、四十人あり。六時四十分、横濱に着。直に波止場にいたりプロイセン号に搭ず。船室

は百三号にして、藤代、稲垣両氏同室なり。夏目、戸塚の二氏は隣室とす。八時、奏樂とともに発船す。たゞしばしの別にも涙脆き婦女の常、ハンケチをしぼる。妹背の別は、余も人も同じかるべし。海上微風動きて、空余（四頁）

波なく霽れ渡りたる航海、心地よき事いはん方なく、瞬く中に本枚の岬を過ぎて、観音崎の砲台を見る。甲板に立ちて故郷を望めば、坐に暗涙の湧かざるにもあらず。同船の外客、英人あり、米人あり、仏独の人もあり。各其国語を操るに、早くも外国にいたりたらん心地す。午後三時頃にやありけん、驟雨俄にいたりて甲板を一洗す。浮雲往来して、富岳は僅に其頂を認めたるのみ。船遠州灘に入る頃より、波浪頗る高く、船体や、動揺す。同行の諸氏、多少の船暈あり。夏目氏最甚しく、晚餐に与からず。余幸に毫末の異感なし。夜十時、浴衣に着換へて寝に就く。郷夢、眠を攪することしばくなり。

ふたとせの別をわびてなく妻をあはれむ心なきにしも  
あらず

おほやけのみちのためぞとおもはずはけふのわかれも  
ものうからまし

蒼波万里接天隅。回首富峰雲外孤。忽有長風吹急雨。

豆南七島瞬時無。」（五頁）

九月九日（日曜）蓬窓夢さむれば、紅暎海波を射る。船正に紀州沖に在り。七時頃にいたり、左に淡路島を見る。紀州、泉州の海岸、危岬参差、風光極めて美なり。左阿右願、九時半頃神戸湾に入る。十時半、投錨。小汽艇に下れば、山田子三郎氏迎へに来る。埠頭には山本豊、たづ子を伴ひて余を迎ふ。同行諸氏は午餐を喫せんとして中常磐マツに向ひ、余はたづ子と同車、厳君の官舎に入る。時正に午なり。午餐の後、山本氏の助を得て、見送の礼状凡そ百通を認め、投函ついで田鶴子を拉いて勸工場に遊ぶ。厳慈両尊と談話数刻、薄暮、同行の諸氏余を尋ねて到る。山本、岩田両氏も同席、晚餐を喫す。本船は、十時抜錨の定なるを以て、八時半、人力に乗じて出づ。一同埠頭に送らる。十時にいたり、予定の如く出帆す。今夜八月既望、天片雲なく金波揺曳、美観いひ難し。淡路島の辺を過ぎて寝に就く。」（六頁）

九月十日（月曜）瀬戸内海の最美なる部分は、昨夜中に航過したりけん、暁起五時、船は備芸の海を通過す。兩岸の山陵一迎一送、島嶼其間に点綴し、美景尚見るべきもの多



し。波穩に風涼しく、小艇無數、船の前後を往来す。午後三時頃、門司海峡を通過す。兩岸の山勢いよ／＼相迫りて、九州の地、本国と相距る。真箇に一葦帯水なり。右に馬関あり、左に門司あり。相對して呼べば、応へんとす。馬関測候所のあるところ、古壇浦の遺蹟なりと聞く。昨神戸を發して、一谷、須磨の遺蹟を見、今壇浦の故蹟を吊ふ。この間の航路、世界航海中、絶佳の景を以て名あり。音に絶好の風色あるのみならず、俯仰感慨、亦幾多の詩感を動かし来る源平争衡の跡、歴々として觀るべし。船玄海洋に入れば、波の穂の上遙に壹岐、對馬を望み、觀望頓に広闊なり。今夜月明昨夜の如く、十一時にいたりて寢室に下る。

福原旧趾已成空。壇浦何、「那」と改。辺海底宮。一部源平盛衰記。宛然見□、「浮来半夜」と改。月明中。」(七頁)

九月十一日(火曜)四時、眠醒むれば船已に長崎に在り。八時、朝食を終へて直に上陸し、一行車を聯ねて、馬淵銳太郎氏を県庁に訪ふ。参事官鈴木兼太郎氏、亦大学の出身なり。談話半時許、一行は向陽亭に入り、湯沐し、午餐を喫す。和洋折衷の料理にして、頗る(二字抹消)甘味口に適す。三時、同亭を辞し、大波止場にいたる。馬淵、鈴木

氏、亦送り來り、県庁の小汽艇を囂して、本船にいたる。本船は、午後五時出帆の筈なりしが、水先案内來らざりしを以て、九時やう／＼出帆す。独逸船ハンブルグ、上海より入り来るを以て、プロイセンは奏樂して之を迎ふ。プロイセンの出帆せんとするや、ハンブルグ亦奏樂して之を送る。Wacht am Rhein終りて、君が代を奏す。月明昨夜の如く、長崎山上のピンヘツドの白字、歴々讀むべし。今夜いよ／＼日本を離るとおもへば、転旅袖の濡ふを覚ゆ。」(八頁)

九月十二日(水曜)暁起。四面茫茫、海波際なくして山影を見ず、波間時に飛魚の潑濺たるを見る。甲板上、外人等種々の遊戲を試む。や、逆上の気味なるを以て、頻に下剤を用ふ。

九月十三日(木曜)五時、眠覺む。蓬窓より海面を視へば、濁浪瀾漫、船は早く揚子河口にあるなりけり。九時前、小蒸汽ブレーメンに搭じて、大江の支流黃浦江に遡る。兩岸の楊柳翠色滴るが如し。処々に支那流の樓門を見る。農家亦其間に点綴す。航行二時間、十一時の頃、上海に達す。我軍艦の淀泊するもの、河口に嚴島あり。や、上りて、豊

橋、摩耶、八重山あり。八重山には將旗を翻せり。日章旗を異域に認む。意氣自ら揚るを覚ゆ。上陸の後、歩して江海北関にいたり、立花政樹氏を訪ふ。氏驚喜、一行を迎ふ。ついで車を僦して鍔馬路東和洋行に投ず。同旅館は長崎人某氏の設立するところなり。日本旅館は同館と、他に立花氏の止宿する旭館との二屋あるのみといふ。日本旅館と称すれども、家屋の構造、寢室の躰裁、全く洋風なり。唯だ

(九頁)

食膳に日本飯、香物ある処、日本旅館たる所以なり。同宿に朝鮮人三名あり。巖島の水夫、数名亦階下に来りて球戯をなす。一浴、椅子に踞して街上を見れば、支那人の往来頻繁なる、風俗、言語、頓に異なるを以て興味自ら多し。四時半、立花氏至る。よりて同行して同氏の寓、旭旅館にいたる。ラムネ、ウイスキーを傾けて談話数時、已にして日本食を饗せらる。階下、三絃の声を聞く。亦水夫等の宴を開くなりといふ。九時、一同同市の公園にいたる。公園は河畔に在り。毎夜九時、音楽隊の演奏ありといふ。外人の両々相携へて入り来るもの、引きも切らず。同園は支那人の入園を禁ずといふ。椅子に踞し、一、二曲を聞きたる後、南京路を歩し、左折して四馬路にいたる。同路は夜店のあ

るところにして、戲場、寄席、酒樓等櫛比し、京都京極通の趣あり。一酒樓に、芸妓の盛粧して客を待つを見る。又轎に乗りて、街上を往復するもの多し。轎は二人にて之を肩舁し、一人提灯を持ちて前に立つ。堤灯の大さ、吉原遊廓の古図を見るが如し。一書肆に就きて、試に梨園叢書の有無を問ふに、無しといふ。帰寓。夜十一時、立花氏亦来りラムネを飲みて別る。」(十頁)

九月十四日(金曜)起床。窓外より街路を見渡せば、種々の物売、呼声高く通り行く。其節は、我國のと大差なし。野菜を売るを見るに、売手の権衡を所有するは勿論、買手も亦秤を手にして、一応之を検査す。流石にこの国の氣風もおもはる。天秤棒は、多く孟宗竹の太きものを、唐竹割にしたるものを用ふるが如し。車には、一輪車甚だ多し。両側に人を載せ、又は荷物載せて押しゆく。一車に五、六人を載せたるも見ゆ。人力車は東洋車と唱へて、車夫の衣服に番号を附けたること、我國に同じ。但し其服装の如き、一様に淺黄を用ふれども、概して汚き事、いふべからず。車体は極めて頑丈に出来て、我人車の如き美觀なし。辻待の車に乗らんとすれば、争うて客を引かんとし、汚れたる手を以て衣を引く。我國の如く、鬪を以て後先を定む

る事、全くこれ無きにや。相互に話す声を聞けば、恰も喧嘩の如し。」(十一頁)

馬車は半日の雇賃二円にして、割合人車よりも廉なりといふ。街路の上、自転車を駆るものあり、人車を駆るものあり。馬車に乗ずるものあり、轎によるものなり。千態万状といふべし。九時、一行車を聯ねて張園、愚園の二園を見んとす。南京路を西に行く事半里許、左側に在るを張園とす。宏壮なる西洋料理店あり。又喫茶台等もあり。園中頗る広闊にして、蓮池あり、芝生あり。雑草等を見るに、狐の鎗、野菊など、皆我国のものに同じ。唯我国の庭園として欠くべからざるは松なれども、こゝには一向に見当らず。張園を出で、尚行く事十町余、愚園にいたる。愚園は觀覽料として、各人十錢を徴す。樓榭相錯綜して、全然支那の古画を見るが如し。樓榭の間には小池あり。小橋を架す。室に入れば、所々名人の書画を掲げ、喫茶台、喫煙台等を置く。皆、紫檀の立派なる机なり。一亭には演劇の舞台もあり。番附等も見えたり。支那人の亭長、しきりに茶を勧む。阿片を喫して眠れるもありき。廊下、壁間等に画ける画の幼」(十二頁)

稚なる、浅草奥山の□、□(不明二字抹消)看板の如し。岩の魁奇なるものを喜ぶこと甚しく、人工を以て殊更に穴を穿ちたるもの多し。恰も芝居の巖石の如きものなり。其側に芭蕉の葉の高く聳えたる、如何に考へても支那的なり。愚園を一覽して、帰途につく。この間の道、柳楊、槐樹、路を夾んで日光を遮り、清涼人に快なり。樹上に蝸声を聞く。我国のに比すれば、声甚だ弱し。眠るが如き声なり。帰路、戸塚氏と写真舖にいたりて、写真を見る。又一書肆をひやかして、一見哈哈大笑を購ふ。上海の街路は整齐にして、二層若くは三層、大厦相列りて、我横浜、神戸の比にあらず。支那人の舖は、金看板をいくつとも無く下げて、金色燦爛、目を奪ふ。誠に美觀なり。唯だ支那人元來の不潔なる故にや、街上何となく一種の臭気あるは堪へ難し。恐くは豚脂の臭なるべし。支那人の商店にある多くは胆膵せり。但し腰以上丸裸にして、我国人の車力等が禪をあらはせるものとは、全く上下を異にす。こは、むしろ支那人をよしとせんか。例の金看板いかめしき老舖にも、この半裸多きは不躰裁なり。東和洋行に帰り、午餐す。立花氏、今日も来りて食事をとにもす。食卓の上は、常に「パンタ」(十三頁)

を動かして涼を取る。之を立花氏に聞く。税関に於てパン  
タを動かす人を雇ふ。一日の賃金十五錢也と。廉といふべ  
し。食卓に集る蠅を見るに、太りて頭赤し。食後清人來り  
て、筆墨を購はんことを勧む。夏目氏、余と少許を購ふ。  
懸直の多き、驚くに堪へたり。午後三時、一同波止場にい  
たり、ブレーメンに投じ、本船にかへる。沿岸漁翁の、四  
ツ手網を以て魚を捕ふるを見る。我国のと少しも異なること  
なし。今夜、新旅客本船に入るもの頗多く、談話室、食堂  
大に賑ふ。別を送りて來りし人々、七時頃かへりゆくとして、  
接吻処々におこる。余に取りては一奇觀たり。晚食後、甲  
板上に上れば、藤の寝椅子、俄に増加して二十有余となれり。  
夜風大に起る。

滾々大江注海東。滔天濁浪勢何雄。中華久矣無人傑、蜀  
呉豪傑今何在」と改。不似水流今古同。歷代文華跡已荒。  
何堪（一旦、判読不能の二字に改め、さらにそれを「忍看」  
と改）白種日（「哲甚」と改）跳梁。花園奏樂歡声湧。  
不許華人來入場。」（十四頁）

九月十五日（土曜）天色暗澹、風威未だ衰へず。パロメー  
ター次第に下降す。大風の惧あり。船、午後二時にいたる  
まで出帆せず。二時、抜錨して航行すること二時間許、又

進行を止む。大風を避くる為といふ。今夜二時頃、風や、  
和ぎて進行をはじめ。

九月十六日（日曜）風威や、衰へたれども、波浪尚高し。  
船客大半、船暈にて甲板に上るもの寥々たり。同行の諸氏、  
皆船室に平臥し、食堂にいでず。無聊甚し。驟雨、時々來  
りて甲板を洗ふ。船客に英独宣教師の一隊十数名あり。今  
日日曜日なれども祈禱せず。

九月十七日（月曜）波浪や、収まり、同行の諸氏元氣亦（二  
字抹消）回復す。終日、微雨、万々として、四面濛昧たり。  
午後三時頃、船員東方を指して曰く、正に台湾の西を通過  
すと（終日）から「通過すと」まで抹消）宣教師の一行、拜  
神の儀をつとめ、讚美歌をうたふ。洋客三、四、喫烟室に  
在りて、賭博を行ふこと盛なり。微雨時」（十五頁）

々來る。午後五時、福州湾に入る。峰巒重疊として、島嶼  
密布し、風景画の如し。恰も瀬戸内海に入る觀あり。兩岸、  
砲台のある処を通過すれば、風光益佳なり。群松の叢生せ  
る山相連り、茂林の下、時に支那風の村落を見る。山骨露  
る、処、飛瀑蜿蜒として下る。一幅、南宋画を見る想あり。

六時、投錨。茶の積荷を為すためといふ。陶器、漆器、絹布等、各種の雜貨を売らんとて、支那の商人多く船中に入り来る。喧嘩比なく、船中頓に賑ふ。竹の寝台を売り来るものあり。試に一椅子を問へば、一円といふ。三十錢に直切れば、直にまけたり。殆ど労力を値せず。支那人の生活も、亦憐むべきかな。船室の傍、支那小艇の来るもの多し。舷窓より、煎餅、ビスケット等を投下するに、争うて之を拾ふ。老若一（十六頁）

男女さながら餓鬼の如し。日本の民、如何に貧困下等のものといへども、恐くはこの態をなさざるべしと、坐に清國を悲む心あり。十一時、就寝。

九月十八日（火曜）終日、細雨濛々として、鬱陶しき事いふべからず。甲板の上、斜雨時に来りて坐すべからず。喫烟室に在りて、国学史を校訂す。この日、船庫に入り、ガハンを開き、日本服、袴、羽織を取出し、着用す。パロメーター、平常に復す。

九月十九日（水曜）暁起。舷窓より覗へば、旭光瞳々として全空拭ふが如し。快適何ぞ堪へむ。午後二時、香港に入

るべしといふ。衆皆喜色あり。四時、香港の岬角を認む。双眼鏡をとりて甲板に上る。景色、福州に劣らず。群嶼の間をゆいて、四時半、香港に入り、九竜の埠頭に着す。直に上陸す。会々、一日本人あり。頻に談話をしかく。之を問ふに、日本旅（十七頁）

店鶴屋の若者なりといふ。因て、同道して之に赴く。同店は、海岸通五層楼に在り。外觀甚だ美なり。然れども、其入口たる、急にして狭き長階を攀ぢざるべからず。人をして、まづ一驚を喫せしむ。室内に入るに及びて、其陋猥亦一驚（二字抹消）予想に反せり。日本婦人二、三、宿泊せり。醜業婦の類にや。器物皆穢くして心地よからず。楼上よりみれば、隣屋亦日本旅館の榜あり。人、「一行」と改、皆隣屋に入らざりしを憾む。入湯を勧むれども入らず。食膳は、鯛の刺身、焼肴等あり。味噌汁あり。割合に喰へたり。番茶の茶漬数碗を傾けて、腹満つ。乃ち同楼を辞し、街上を散歩す。戸塚君、写真師梅屋にいたり、香港全景の写真を購ふ。同店をいで、一煙草店につき、葉巻一箱を購ひ、又絵はがき数葉を買ふ。暑熱堪ふべからず。船室にかへりて、冷水を以て全身を拭拭し、浴衣を穿つ。快いふべ（十八頁）

からず。船中に支那商人の雜貨を売らんとて群集すること、福州に於けるが如し。

九月二十日（木曜）朝食を終へたる後、再び九竜より渡船。朝星に乗じて香港にいたる。九竜と香港とは、相對して其間海上四、五丁許。朝星、晩星の二舟ありて往復す。賃金、上等十錢なり。香港にいたり、tramwayによりて香港の高峰に上る。鋼条鉄道にして、傾斜四十五度許の山路を上る。峰上 peakhotel あり。更に進むこと少許、兵營あり。四望快闊、長風髪を吹いて、快いふべからず。戸塚君曰く、景色大連湾の如しと。元來、香港は海上の一島にして、全島花剛石なり。樹木の繁茂するもの少けれども、雜草、矮木、全山を掩ふ。処々丘陵を開きて、高楼大厦を架す。皆英人の家にして、多くは兵營に関する士官の住居たり。羊腸九廻して頂上に至る迄は、十八町もあるべし。道路極めて立派なれども、暑熱堪へ難く、喘ぎ／＼頂上に達す。最頂上には、巨駁（ゴツ）の誤）を備ふ。其下、一支那屋あり。ラムネ、氷等を売る。少憩してラムネ二瓶」（十九頁）

を傾く。甘味忘れ難し。十一時、再び停車場にいたり、待

つこと半時余、十一時半、発車。香港市に下る。余と戸塚君とは郵便局にいたる。はがき数葉、及国文史の原稿を投入せんがためなり。香港の市街たる繁榮は、上海に及ばざるが如しといへども、巍然たる層□（不明一字抹消）樓相連りて、昇降にはエレヴェーターを用ふ。全屋悉く大理石なるが如きは、欧米の大都といへども及び難かるべし。住民二十三万余、其内二十万は支那人なりといふ。支那人の富裕なるもの甚だ多く、大厦高楼多くは支那人の所有なりと聞□（不明一字抹消）く。公園の辺、目馴れぬ草木多く、早くも熱帯に入りたる事を知る。山上の雜草は、日本のに同じきも多くあり。昼顔の咲きたる、多くは紫色にして、我国の朝貝に異ならず。十二時、船にかへる。午後四時にいたり抜錨す。宣教師の一群、広東より来るもの、尚二、三人を加ふ。横浜より同乗し来りし葡萄牙人、こゝに下船す。上海より搭乗せる一美人、妙齡十八、九、船中の矚目するところ、亦こゝに上陸す。晚、宣教師等と語る。皆支那に布教の行はれ難きを慨く。支那の騷亂を惹起せしものは、自己の所為たるを知るや否や。」（二十頁）

九月二十一日（金曜）四面茫茫、山影を見ず。終日、読書と睡眠とにふける。飛魚群を為して飛ぶ。恰も千鳥のむら

立つが如し。炎陽赫々として堪へ難し。五時、入浴。夜にいたりて、甲板の上、大に涼し。下りて船室に入れば、熱汗淋漓、眠に就くこと難し。舟中、奏楽しきりなり。

九月二十二日（土曜）終日、山を見ざる事、昨日の如し。午後三時頃、驟雨沛然として、甲板の上、頓に清涼を覺ゆ。夜に入りても涼し。熱帯に在らざるが如し。然れども、下りて船室に入れば、蒸熱堪へがたし。

九月二十三日（日曜）正午の榜示に曰く、香港を去ること九百四十四哩なりと。午後、家信を認む。夕方にいたり、驟雨来ること昨日の如し。

九月二十四日（月曜）朝食を終へて甲板に上れば、遙に一抔の青黛を認む。正午の頃、左舷に四、五の島嶼を見る。今夜、新嘉坡に着すべしといふ。信書数葉を認む。」（二十一頁）

九月二十五日（火曜）午前六時、離岸。甲板にいづれば、前面に新嘉坡の市街をみる。左右前後、幾多の小嶼あり。遠く之を望めば、松樹の叢生せる小山の如し。双眼鏡をと

りて見るに、皆椰子類の樹木なり。市街の遠景は、品川湾より高繩辺を望むが如し。商船の碇泊せるものあまたあり。日本三井の剣山丸、亦こゝに在り。忽ち見る、二箇の小艇あり。波を越えて射るが如く来る。小艇は、いはゆる独木舟なり。これ旅客より錢を乞はんとするものにて、旅客若し錢を海中に投入すれば、舟人は直ちに水中に飛入りて、之を拾ひ来るなり。其巧妙なること、亦一種の芸術といふべし。八時にいたりて、船いよく埠頭に近づき、埠頭に投錨せしは、朝食を終へたる頃なりき。よりて一行は、直に上陸す。会（「会々」の意か）、一土人あり。日本旅館の名刺を持して来り、よく日本語を操る。乃そのいふが俚に、馬車二輛」（二十二頁）

を雇ひ、先づ植物園にいたる。沿道の樹木鬱鬱たる様、流石に熱帯の樹林とおもはれたり。支那人の住民甚だ多きを認む。途中兵營あり、学校あり、太守の邸宅あり、士官の官舎あり。いづれも美麗なり。案内の土人、頻に講釈をなせり。十時、植物園に達す。園内頗る広闊にして、手入亦よく行届けり。我大学の植物園に似たり。但し、其異木花卉の多きは、他に類なきところなりといふ。花壇の傍、虫吟を聞く。鈴虫の類にや。美音未だかつて聞かざるところ

なり。園内池ある事、亦我大学植物園に同じ。池中に珍しき水鳥泳げり。沼には蓮花の類、黄白の花を匂はせたり。又園中のや、小高き処、動物を畜ふ。我上野の動物園よりは規模小し。猿猴の類、虎、孔雀等、十四、五種を畜ふのみ。大蛇、鱷魚、亦在り。同園を一巡して、帰途博物館にいたる。同館と植物園とは、いづれも殖民政庁の設立するところにして、」(二十三頁)

観覧料を徴せず。館中には、この地方の動物の剥製、土人の用ふる船舶の雛形、武器の類等を集む。人類学者にとりて、恰好の材料たるべし。日本の蟹の剥製ありたり。福井辺の産なるべし。同館をいで、旅館にいたる。旅館は、松尾兼松といふ。さきの土人は、其雇人にて、名を舟兵衛といふとぞ。旅館の周囲には、日本の娼婦多し。三々五々、細帯にて往復する様、如何にも見苦しくおもはる。旅館の宿帳には、塩田真、福地復一等の名も見えたり。昼飯を命ずるに、鯛のてり焼、さしみ等あり。米は印度米なれども、非常に甘かりき。午後三時、再び馬車にて同所を辞し、海岸通を経て船にかへる。市街の美、もとより上海、香港には及ばざれども、尚大厦の空に聳ゆるもの多し。□、(不明一字抹消) 全市の幅大は、遙に両港に超えたるべし。上海

には、支那人の青衣大に目立ちたるが、印度人の衣服は、赤色を尊ぶこと甚しきが如し。男子皆、赤色の下衣を纏ふ。遠く之を望めば、全く女子の如し。」(二十四頁)

帽の代りに、亦赤布を纏ふ。赤色の目立つ事、頗る著し。馬來人にや、銅色のもの多く、光沢ありて、古仏像を見るが如きものあり。紫金色□、(不明一字抹消) もさながらにおもはれたり。船、五時半にいたりて抜錨す。こゝより新に乘込みたるもの、亦四、五名あり。甲板の上、藤の寝椅子縦横して、非常に狭隘を感ず。夜十時頃、驟雨来る。

九月二十六日(水曜) 天曇りて細雨時々来る。□、(不明一字抹消) 午前十一時頃、竜巻を見る。船長曰く、かく近く見ゆるは珍しき事なりと。正午の榜示を見れば、新嘉坡を去る事、已に二百二十六哩なりと、(三字抹消) に在り。今日甚だ熱からず。喫烟室に坐するに足れり。夜、風雨大に起る。

九月二十七日(木曜) 暁起。船はペナンに在り。上陸せんと欲すれば、午前九時発船との事に、おもひ止る。ペナンの遠望は、新嘉坡に似たり。椰子の茂林、時に印度風の家



屋を其間にみる。背後に高山あり。飛瀑の」(二十五頁)

に一帶の陸地を見る。これセイロン島なり。十二時頃、(二十六頁)

下るあり。景色恐くは新嘉坡より佳ならん。ペナンは亦一島嶼なり。午前十時半にいたり、船やうく抜錨す。今日微雨時に来り、清涼甚し。夜風大に起り、波浪非常に高まる。

九月二十八日(金曜)朝来(二字抹消)旭日瞳々として海波を射る。快いひがたし。南方スマタラの島を見る。

名にしおふ印度荒海波だちてみえかくれするすまたらの山

九月二十九日(土曜)今朝始めて放晴。夜に入りて、弦月を櫓頭に見る。探偵小説を読む。

九月三十日(日曜)今日も晴天風強し。日曜日なるを以て、宣教師等の礼拝あり。午後、荷物庫に入り、日本文学全書を取り出し、大和物語をよむ。夜、一大軍艦の東に航するを見る。

九(「十」と改)月一日(月曜)六時、甲板に上れば、右方

遙にコロンボの市街を見る。午餐を終ふる頃、投錨。数多の印度人入り来りて、案内せんと乞ふ。其中二人は、日本人の証明書を有す。一は、坪井氏以下、五、六人の署名あり。コロンボ在住の者なり。一は、姉崎氏以下、七、八人の署名ありて、カンデイの男なり。船の出発は、明日午前十時なりといふを以て、カンデイに行くこと能はざるを恐る。よりて、コロンボ人に案内を依頼し、端舟に乗り、波止場にいたる。波止場の内部には、あまたの印度人ありて、両替せんと呼ぶ。此地の通貨はルビーにて、他に通用せず。不便甚し。殖民政庁の前を過ぎて行くこと二町余、案内者一行を導きて、British India Hotelに入る。同館は海岸に在り。あまり上等の宿屋に非ず。同館に少憩の後、馬車二輛を雇ひて、コロンボの南仏寺にいたる。沿道、椰子樹を以て囲める」(二十七頁)

庭園相連り、風致尠からず。路を行くもの黒奴(八字抹消)英人の家最も多く、土人の家、亦其間に点綴す。クラブあり、寺院あり、旅館あり。荷車は牛を以て引く。其牛、新

嘉坡に見たるものよりも小し。案内者曰く、小けれども力最強しと。黒奴、車に傍うて走り、花を投じて錢を乞ふ。甚だうるさし。女子のや、富裕なるものは、皆耳環を垂る。仏像を見る想あり。草木繁茂して雑花乱発せる中、幾多の黒奴の往来するを見る。古代の印度をおもつて、無限の感慨あり。案内者指点して、彼は仏徒なり、彼は回教徒なり、などいふ。行く事七哩、小路を左折して仏寺に入る。寺院の構造平家にして、奈良あたりの金堂の如し。戸を排して入れば、壁画は尽く地獄極楽の画なり。花を捧げたるを見るに、花輪をもぎとりたるもの多し。賽銭箱の形、我国のと全く同じきは一興あり。釈迦の像、大小いくつもあり。半身を敬て、臥せる」(二十八頁)

像あり。坐像もあり。この寺、古寺なりと聞けども、丹彩すべて新しきは、近き頃修覆を加へたるにや。石階を攀づること少許、舍利堂あり。其形独逸の帽子の如く、かつて硝子製の舍利を蔵めたるものを見たと同じ。右に下れば、尚一小堂あり。仏像数体を安ず。同処を出で、又別に一堂あり。同処を一覧して、観覧全く終る。観覧料として、一人二十五仙を徴す。又来観者の名簿を備へて記入せしむ。夏目氏日本字を以て、一行の名を署す。□、□、□(不明三字

抹消) 同堂に貝葉を売る。□、(不明一字抹消) 各一葉を購ふ。価二十錢。同寺を辞して旧路に出て行く事半里余、小雨いたる。右折して肉桂園にいたる頃、雨又晴る。途に競馬場あり。案内者、肉桂の枝を折りて車上に挿む。この辺、肉桂の杖を売るものあり。進んで博物館にいたる。修覆中にて閉館せり。Victoria Park (二十九頁)

には、音楽所其他の設ありて広闊なり。遙に近傍の丘陵を望む。樹林鬱鬱たる処、赤色の樓屋を認め、牧場には羊豚群遊す。天然の美、いひ難きものあり。竹叢をみるに、我國の如く矗立せず、多くは屈曲せり。此君の節も、印度にはあまり尊からぬにや。バンヤン樹を見る。樹枝垂れて、又上る。其奇、驚くべし。猫は三毛猫にして、小きもの多し。土犬、我國のと異ならず。狂犬多しといふ。行いて湖畔にいたれば、風景、不忍池の如く、池畔、汽車の駛走するを見る。又印度兵の兵營あり。左右曲折して停車場の前を過ぎ、市街にいたり、又青物市場を見、印度の□、(不明一字抹消) 寺を見る。今尚建築中なり。市街の繁盛は、上海に同じ。然れども、家屋の宏壯なるもの尠し。地勢広闊なるを以て、香港の如き高樓を築く必要はなきなるべし。大体の様子は、新嘉坡に似たりといふべし。然れども、其

整頓せるは、新嘉坡に過ぎたり。又最著しき差別は、支那」  
(三十頁)

商店の一軒もなき事なり。人口は十八万、英人は三千人ありといふ。日本人は僅に一戸ありといへり。旅館にかへりて後、再び戸塚氏と写真舗にいたる。六時半、晩食成ると告ぐるを以て食卓に就き、大にライスカレーを食ふ。七時、同処を出で海岸に入り、端艇を雇ひて船にかへる。聞く、昨夜東行せし軍艦は、日本新造艦朝日なりと。ビール数杯を傾けて甲板に臥す。涼風嫋々として、身の熱帯に在るを忘る。

十月二日(晴)(一字抹消)火曜) 印度人多く甲板に來りて、土産を売る。寶石、象牙細工等なり。船の周囲には例の錢拾ひ舟集まりて、類に喋々す。其舟、平たき板を二、三枚つなぎたるものにして、櫂は竹を二ツに割りたるものなり。其簡單なる事、比類すべきもの無し。端艇をこぐ櫂は、飯の籠の如きものなり。これ亦一奇とすべし。裸体なる兒童の七人、八人、同声にて唱歌をうたひつゝ、右の手を脇腹にうち当て、」(三十一頁)

拍子をとる。真に噴飯すべし。印度人の物を売る、其ひつこき事、支那人にも超えたり。又多く日本人の証明状を携ふ。中には、この野郎の物は偽物にして、氣を付けて買ふべしなど書きたるものあり。得々として余等に示す。十時半にいたり、解纜す。昨夜、独乙の船、兵卒二千五百を載せて、(不明一字抹消)入港す。本船出発に臨みて、互に呼応する声は、海(不明一字抹消)若を驚かすべし。夜風、「雨」と改)あり。謡曲をよむ。

十月三日(水曜)晴天にして風あり。幾多の汽船に逢ふ。晩餐の頃、右にラクレテンの群島を見る。夜、風雨大にいたる。謡曲をよむ。夜、氷を取寄せて、朝日ビールを傾く。朝日ビールこゝにつく。

十月四日(木曜)晴天、風あり。終日船を見ず。無聊甚し。夜、月色玲瓏、海波を照し、好景寝に就き難し。藤代氏とウイスキー、アポリナリスを飲む。

十月五日(金曜)晴天。海波全く無し。名にしおふ大洋も、平坦畳の上を行くが如し。肩大にこるを以て、下剤を用ふ。」

(三十二頁)

新嘉坡所見

亭々椰子直參天 荷葉蓋池大似船 熱國一分有秋意 虫声  
唧々草間伝

(十数行分、空白あり)

コロンボにて印度人の手品師船上に來りて、種々の技を為せり。瓢箪を以て作りたる笛を吹く。其音、我國の飴屋の如し。コブラといふ蛇を使ふ。数番を為し終へて、見物人より錢を乞ひかへりゆけり。」(三十三頁)

十月六日(土曜)午後、船の動揺や、甚し。午後(二字抹消)四時頃、大魚の波間に飛躍するを見る。イルカなるべしといふ。此日正午の榜示に、コロンボを去る事一千三百九十二、「(四十一)と改」淫なりとあり。「ソコトラ」の島、近くにありといへどもみえず。藤代氏、

十月七日、(四字抹消)

はるくもきぬるものかな見渡せばすぐそこに(三字

抹消)そこらの島もみえけり

夜、藤代、夏目二氏と甲板に談じて、十一時にいたる。

十月七日(日曜)藤代、戸塚二氏と、試に耶蘇教の独語説

教を聞く。夜、月色玲瓏、金波揺曳、正に十五夜に当れり。秋思無限。

十月八日(月曜)朝、陸地を認む。午後にいたり、遙にアデンの山を見る。夜十時頃、アデンに入る。土人、早く短艇に乗りて、駝鳥の卵、羽毛、籠等を売りに來る。明朝出發すべしといふを以て、上陸せず。十二時過、はじめて船室に下る。今夜、月明昨日の如し。」(三十四頁)

十月九日(火曜)暁起。蓬窓下に幾多の小舟ありて、土人の産物を売るあり。紙卷一箱を購ふ。価、一シルリング六ペンスなり。船客中、駝鳥の卵、水牛の角等を買ふもの多し。土人、毛髪縮れて赤く、印度人に似て稍醜なり。アデンは全く楮山にして、一樹蔭なし。すべてこの辺の島嶼、皆巖石兀立して、状貌奇怪なれども、寸緑なし。午前九時半、抜錨。午後五時頃、紅海に入る。其入口は、いはゆるバベルマンデブの海峡にして、涙の岬の義なりといふ。この処、左右に岩山突兀として、暗礁亦尠ならず。往古帆船にてモンsoonに遭遇すれば、進退谷まる処なるを以て、この名ありといふ。左右共に英國の砲台あり。夜月明、眠るを忘れしむ。スツ、トガルト東行す。

十月十日（水曜）暁起。左方に幾多の小嶼を見る。しばらくしてみえず。今日、汽船に逢ふこと四、五艘に及ぶ。暑熱、頓に加はる。はじめて熱帯の暑熱を感ず。ラムネをのみむこと頻なり。夜に入り、上等」（三十五頁）

船客の催にて舞踏会あり。この暑熱に数番の舞踏とは、酔興の至なりと笑ふ。月色、昨夜の如し。

十月十一日（木曜）朝、夏目君と英語説教を聞く。炎威、昨日に比してや、衰ふ。午餐にライスカレーあり。豪啖、衆を驚かす。薄暮、左方に四、五の島嶼を見る。夜、氷を喫す。甲板の上、同行諸氏と談じて、十一時、寢室に下る。今日、冷水浴をなす。

十月十二日（金曜）暁起。右方に一灯台を見る。榜示に曰く、今夜十時、郵便締切なりと。夏目氏、耶蘇宣教師と語り、大に其鼻を挫く。愉快なり。戸塚氏、船医を訪ひて、衛生上の事を注意す。夜八時頃、右にシナイの山を見る。九時、月出づ。紅海いよ／＼狭うして、灯台前後応接に遑あらず。冷浴、昨日の如し。

十月十三日（土曜）六時、離幕。甲板に」（三十六頁）

いづれば、左方一帯に赭山を見る。右方、亦陸を見れども、稍遠し。すべてこのあたりの山、寸緑なくして、赤色の禿山のみ。これ紅海の名ある所以なり。朝食後間もなく、蘇士に着す。遠望、家屋と不毛の野のみにして、草木を見ず。檢疫医来りて、一同を検査し去る。土人來りて、種々の物売ること例の如し。紙捲烟草、腕飾、写真等なり。ジェルサレムの草花を以て、押絵を製したるもあり。写真及郵便はがき数葉を購ふ。午後二時、出発す。運河の兩岸は、茫茫たる曠野にして、全く不毛なり。運河の長さ八十哩といふ。其幅は、甚だ狭し。我がプロイセン号は、吃水二十三尺にして、運河には二十四尺以上の船舶をして通ぜしめずといふ。岸上遙に見渡せば、例の赭山連互無際、処々駱駝の相連りて行くを見る。河畔、合図の爲めに設けたる屋舎、所々に在り。其近傍には、多少の草木あり。」（三十七頁）

薄暮、Bitter湖を過ぐ。すべて運河の中、湖水ある事四ツ。之を利用して、この大工事をなせるなり。湖中三、四の漁舟の、魚を捕ふるを見る。曳網にておしつめゆけば、魚の

飛ぶ事、さながら落葉の散るが如し。誠に壯觀とす。夜十時、月出づ。

十月十四日(日曜) 三時頃、喧嘩の甚しきを以て目覚む。船は早くポルトサイドに在り。残月、天に在り。冷風膚を襲ひ、早く、(二字抹消) 自ら秋意の乾坤に満つるを覚ゆ。再び一睡して、六時、甲板に出づ。土人の産物を売るもの、已に甲板に集まる。軽業師ありて、技を演ぜんことを乞ふものあり。又一扁舟三、四の男女あり。ギターを弾じつ、錢を乞ふ。清楚愛すべし。其音調は、いたく清樂に似たり。郵便はがき数葉を購ひ、直に之を認め投函せしむ。八時、出港。港口、運河工事の設計者テオシー氏の銅像あり。北欧州に面して立てり。十時頃、左方に」(三十八頁)

一市街を見る。其名を知らず。夜、(二字抹消) 午後、荷物室にいたり、黒服を取出して之を穿つ。

十月十五日(月曜) 朝、喫烟室に在りて、アルベルト号乗込乗客表を見る。内に、(二字抹消) 之によりて、松本亦太郎氏、十月十六日、ネーブルより乗船、帰国の途に就くを知る。北風寒くして堪へ難し。船中ビール尽きて、シエン

ケの戸閉づ。荷物をベルリン停車場に送る様、荷物掛に依頼す。

十月十六日(火曜) 午後、荷物蔵に入り、荷物の入替を為す。この日、食卓給仕其他に、手当を与ふ。食卓給仕二十五マーク、船室給仕二十マーク、湯番十五マークなり。明朝メツシナの海峡を過ぐべきを以て、今夜早寝せんとて、一同十時頃就寝す。

十月十七日(水曜) 朝五時頃、藤代氏の呼覚すに驚きて、甲板に上れば、両岸に陸地を見る。其間甚だ寒し(二字抹消) 狭し。然れども、尚未だ海峡に至らず。再び、(二字抹消) 下りて船室に入り、六時、再び甲板に出づ。この時は、船已に海峡を通過せり。」(三十九頁)

五分、時を後れしを悔ゆ。風呂番のおやぢ、戸塚氏に向つて、手当の少きを訴へたりと聞く。欧州人の面の厚きこと、これにて知られたり。朝餐の頃、左方にストロンボリーの火山を見る。形少しく富士山に似たり。山麓に、白壁の相連るを見る。郵便締切午後五時の掲示あり。地図を見るに、緯度は已に青森に同じ。北風の寒きも、げにもと首肯す。

五時頃、カプリの島を見る。断崖、絶壁、洞門もありて、奇勝多きが如し。独逸人の多く遊覧するところなりといふ。同島を過ぎて、右の一岬角を曲れば、ヴェスヴィアス山、雲際に聳ゆ。其麓一帶、白屋相連りて、風光画の如し。北方遙に、ナポリの市街を見る。やうく近くに随ひて、船舶にあふ事いよく多し。」(四十頁)

六時、ナポリの港に入る。街灯煌耀、一種の美観たり。港上、ケーニツヒアルベルト号、亦碇泊す。相距る事、僅に数十間なれども、今夜は檢疫済まざるを以て、上陸を許さず。松本氏等の一行に逢はざりしは、遺憾なりき。九時半、アルベルト号、拔錨して去る。細雨霏々として来る。姉崎氏の書を得。

十月十八日(木曜) 暁六時、喇叭の声に目覚むれば、檢疫医来れりといふを以て起く。朝食の時刻、檢疫医去る。船の周囲、已に幾多の案内者、旅館の手代等群がり来り、喧嘩なること、他の諸国に同じ。売物には、菓物、花束、腕飾等なり。絵はがき教葉を購ふ。案内者の一人、林学博士河合氏の証明状を有するものあり。之を雇ひて、一同小蒸汽に下る。埠頭を出で、一馬車に搭乗す。コロンボに上

陸せしより、陸を踏まざること十八日、今始めて欧州の地を踏む。快、何ぞ極まらむ。案内者は余を導」(四十一頁)

きて、先づ同所のジエスウィット寺院に至る。大理石を以て装飾の美を為し、壁画、天井画等、大作多し。金色燦爛、人をして其莊嚴なるに驚かしむ。僧侶あり、経を誦す。円頂にして、赤色の衣を穿つ。宛然、仏僧の如し。大体の有様、寺院に似たるもの多し。次で又他の二寺を見る。第二のは古□(不明一字抹消)寺なるが如し。案内者、一々其由来を説き、壁画をはじめ種々説明したれども、今皆忘れたり。多くのチャベルありて、所々に聴聞の信男信女、多く群集せり。神壇の左側、細き入口あり。案内者曰く、これ懺悔場なりと聞く。この処尼寺にして、懺悔場は、たま〜以て密売の場なりと。果して然るや否や。いづこも結構の壮大なる、装飾の莊嚴なるは、我国仏寺の及ぶところに非ず。多くの善男女の殊勝氣に念仏するも、流石にむかしの様思はれたり。」(四十二頁)

寺院の入口には、多くの乞食ありて、錢を乞ふ。甚しきは、称名に余念なき善女の手を出して、錢を乞へるあり。この国の風俗も、おしはかられたり。船上に来る案内者、物売

の如きも、誰に向つても捲煙草をねだるなり。寺院を出で、博物館にいたる。同館には、種々の彫刻物等、珍奇、貴重なるもの多し。就中、ポンペイの遺蹟より発掘せし壁画、器具等、多く陳列せられたり。彫刻物には、大理石のもの、金銅のもの、皆美術史上に有名なるもの也。かつて書籍の上にはお目にかゝりしもの多けれども、専門ならぬ身の、一ツも記憶に存せぬぞ、残念なる。ポンペイの遺物多きが中に、金環に指の骨のその俣附着せる、如何に当時の天災の猛烈なりしかを想はしめ、千歳の下、人をして寒心せしむるに足れり。硝子器等種々あり。又婦人裝飾等の具等を見るに、其贅沢なる、実に驕奢の極点に達して、天」(四十三頁)

譴を蒙りしには非ずやと疑はしむ。戯場の切手として使用せられたる淑戸物の鳩、頭蓋骨等色々あり。その階級によりて、切手に種類あるなり。ポンペイ全体の模形もあり。又一室には特に春画、及び同様の彫刻物等を蔵む。背面攻撃をなすもの、三、四葉を見受けたり。又悪魔の山羊を犯す置物あり。驢馬の獅子を犯して、金冠を得る絵あり。陽物の形、非常に大なるもの、壁間にかゝれり。又四、五人の陽物にて、大なる器物を支ふる様に作れる置物もあり。

おもひ切つた作り物、実に多し。この日、十二時出帆に付、ポンペイに遊ぶ暇なかりしかども、この博物館に遊びて、已に其大要を知り得たる心地せり。十時半、こゝを出で、王宮に至る。王宮は、三百年前の建築に成るといふ。室内の模様は我が皇室に同じけれども、間数の多きは遙に我皇室にまさり」(四十四頁)

たるべく、裝飾亦美麗にして、燦爛目を奪ふ。舞蹈室、芝居舞台等もあり。全体、大理石の建物にして、庭園の美こそなけれ、巍然たる輪奐、到底我皇室の及ぶところに非ず。恐れ多き事ながら、我皇室の今少しく大規模に壮大なる建築にてあらばやなど、坐に慷慨の心を生ず。宮中のチャペル、亦美麗なり。宮中には、諸官員皆喪章をつけたり。皇帝崩御後の宮中喪なるべし。案内者の挙動を見るに、握手する真似して、常に一両片の貨幣を官吏に握らしむ。これにて、何事にも黙々たるが如し。案内者は、往々絵画、器具等に手を附けて見る事あり。これにても、官吏は一言も咎めざるなり。之をおもへば、又彼国の腐敗せる様もおもはれて、坐に我宮中の森厳なるに感涙も湧くべし。総じて此国の風は、賂賄公行と聞くは、さもあるべし。王宮を辞して船にかへる。時已に午なり。午餐を終へて、船発す。



幾多の危岬、前後出沒して」(四十五頁)

景色頗る見るべし。海上より遙にネーブルを見れば、古来史上に幾多の事蹟を残したる古港、眼前に在り。感慨無量なり。今夜、晚餐には特別の馳走あり。明日ゼノアに上陸する人多き故なるべし。クナルボン／＼と唱へて、辻占の如きものいづ。其中には、各一ツの紙帽子あり。海軍形あり、ナポレオン形あり。種々雑多なり。余一ツを摘むに、偶然日本人と記せるものを得たり。開けば日本流の笠なりしも一興なり。食後、皆この紙笠を被りて、笑ひ興ずる声、船中に満つ。奏樂、唱歌、盛に起る。我國歌のなきは、実に残念なる心地す。十時、寢室に下りぬ。

十月十九日(金曜)午後一時、ゼノアに着す。ゼノアは、丘陵によりて層々街衢を為し、遠望頗る美なり。港内、巨艦多く停泊せり。檢疫医來り、上陸者を一見して去る。午後五時頃にいたりて、はじめて上陸。端艇によりて税関に」(四十六頁)

いたる。ゼノア・グラント・ホテルの若者に、案内を依頼す。万事都合よし。税関にては、何等の検査も無かりき。こ、

にて、明朝巴里迄の直行汽車切符を購ふ。同処を出で、ホテルの馬車に乘じ、旅館にいたる。途中、夜に入りたればよく分らず。グラント・ホテル・ド・ゼネは、オペラの直ぐ前に在り。中央繁華の処たり。三階の三室を借りて入る。裝飾、善美を尽せり。独乙のミンヘンピアを傾く。甘味いひ難し。リフトにて上りゆく心地、まことに快し。諸処へ、(三字抹消)晚餐後、若者の案内にて公園にいたる。音楽会あれども聞かず。市街を散策し、はがき等を借りてかへる。帰宿の後、更に戸塚、藤代、稲垣三氏と市中を散歩し、無暗に目的もなく歩行し、裏店の如き処をいくつともなく通り來る。市街の立派なる、建物の大なるは、ネーブルにも越えたり。帰れば、已に十時なり。諸処へ安着の報知を記、(一字抹消)出さんとて、頻にはがきを認め、夜十時にいたる。

十月二十日(土曜)鶏声遙に聞えて、暁鐘近く鳴る。驚起して旅装を調、(一字抹消)整」(四十七頁)

へ、旅館の馬車にて停車場にいたる。途中、青物市場を過ぐ。我国の朝市と大差なし。停車場前には、コロンブスの銅像あり。停車場に入れば、クツクの案内者あり。之に依

頼して、乗車の事を世話せしむ。ポーターの如き、すべて仏語、以語にあらざれば通ぜず。一行中、仏伊の語に通ずるもの無く、一時、大にまごつけり。八時四、五十分にいたりて、汽車発す。中等車は、一室八人詰なり。我等五人にて一室を占領す。船の(二字抹消)速力、我国のよりは稍や早きを覚ゆ。沿道の風色、我国に似たる事多し。たゞ処々、牧場に羊牛の徘徊する、白屋の点々たるを異りとなすのみ。幾多の停車場を通過して、アレツサンドリアに達す。こゝにては、昇降や、盛なり。再び発車して、トリノに到着せしは、十二時半頃なりき。停車場前のHotel de Suisse-Françaisといふ一旅館に投じ、午餐す。午餐の後、戸塚、藤代、稲垣三氏と市中を散歩す。トリノ市は、(四十八頁)

街衢整然として、大通りの如き、頗る立派なり。エマニユエル二世の銅像あり。四時四十分、再び停車場にいたり、巴里行急行汽車に投ず。乗客多くして、五人一室に入る能はず、余と稲垣氏と一室に入り、他の三氏は別室に入る。八時頃、モダンに着す筈なりしが、一時間ばかり後れたり。食事車に入りて、麦酒、葡萄酒、パン等を喰ひ、室にかへればモダンに着す。この地、已にアルプス山中に在りて、

以仏兩國の境界にあたれば、仏の検税吏来りて、荷物を検査す。但し我等が車に入りしものは、夫婦連の一人(二字抹消)男の荷物を一寸検査せしのみにて、あとは少しもみず。すべて儀式的のものなり。このあたり、アルプス山中にて、昼ならば面白かるべけれども、夜故分らず、汽車の速力非常に早きを以て、動揺もはげしく、頭を出して車窓外を見るも危険なる心地す。船室内轟々として、半眠半醒の中に、多くの停車場を通過しゆく。(四十九頁)

同乗の仏人夫婦あり。頗に接吻す。已にして、天やうやく明く。黄葉の樹林、平野に相連る。著き喬木は少し。九時頃、巴里里昂停車場に着す。巡查に問ひ、馬車二輛を雇ひ、まづ正木氏の寓をRue de Belles Feuillesに訪ふ。正木氏は不在、渡辺氏一人あり。一同少憩、朝食を饗せらる。已にして、同氏とともにRue de Gustave Courbet 22なるMme Naudinの家にいたり、空室ありやと問ふ。幸にして空室数箇あり。よりて午後引越の契約をなし、同氏とともに市街を散歩し、凱旋門にいたる。それより日本公使館にいたる。公使栗野氏に面会、たま／＼驟雨いたる。雨やどりして出づ。夕方、夏目氏、渡辺」(五十頁)

氏とともに停車場にいたり、預けおきたる荷物を取りにゆく。余は、藤代氏とともにマラコフ街なる池辺氏の寓を訪ふ。同氏亦、魯西亜旅行中にて不在なり。夜、一行の諸氏とヴィクトル街に晚餐を喫してかへる。(以上十月二十一日)

十月二十二日(月曜)午、一行とヴィクトル街に午餐し、渡辺氏を訪ふ。同氏の案内にて、博覧会にいたる。まづトコカデロよりエイフェル塔に上る。塔上にて、故郷の知友等へ手紙を出し、塔上に氏名を署して下る。それよりChamp de Marsの教育館等を巡覽し、其規模の広大なるに驚く。又platform mobileに乗りて、Ville de Paris館の前に下り、日本茶店の前を過ぎて出づ。帰途、渡辺氏の寓に午餐し、晚餐後、同氏の案内」(五十一頁)

にて、地下鉄道に搭じ、Grand Boulevardに遊ぶ。燦爛たる夜色、真に不夜城の如し。一珈琲店に麦酒を傾け、再び地下鉄道にて、トロカデロにかへり、帰寓夜一時。

十月二十三日 朝九時、樋口勘次郎氏来訪。同氏とともにトロカデロ附近にて午餐を喫し、余と藤代氏とは寓にかへる。谷本氏来訪の約あるを以てなり。三時、同氏いたる。

同行の諸氏、亦帰寓。相共にヴィクトル街の日本料理店にいたり、蕎麦、天ブラ、味噌汁を食ひ、久しぶりにて日本酒、米飯をくふ。同店にて、大島氏、細井氏等に逢ふ。木原氏の訃を聞く。実に気の毒の至也。九時、同処をいで、谷本氏に伴はれて、グランブルヴァアにゆき、Casino de Paris Tavern Olympia等に遊ぶ。いづれも巴里不夜城にして、消金窩なり。其繁華、人目を眩」(五十二頁)

し驚駭に堪へざらしむ。

十月二十四日(水曜)朝、谷本氏来る。藤代、戸塚二氏とともに、博覧会前の一店に午餐を喫し、美術館に遊び、絵画、彫刻の陳列を見る。日本の画、如何にも見苦し。帰途、しばしばビールを飲みてかへる。今夜は、寓居にて主婦と俱に晚餐を喫す。建部氏来訪。

十月二十五日(木曜)一同、渡辺氏を訪ふ。正木氏、已に帰宅せり。久闊の情を慰す。それより、稲垣、夏目、藤代三氏と博覧会にいたる。platform mobileに乗りて、美術館にいたらんとし、余独り早く下り、衆を待てども来らず、ひとり諸処を散歩し、買物をなして帰寓、晚餐を渡辺氏の

寓に喫す。岡田氏亦いたる。笑談大に賑し。

十月二十六日（金曜）夏目、藤代二氏」（五十三頁）

と博覧会にいたらんとし、路雨降りいでしかばPlace de la Concordeの近傍にて午餐を喫し、帰宅。午後、樋口氏来訪。夜、渡辺氏の寓に晚餐す。

十月二十七日（土曜）今朝はよく晴れたり。朝、藤代、夏目両氏と博覧会に入り、工芸館及機械館等を巡覧。午後四時頃帰宅。晚餐は、渡辺氏宅にて喫す。帰途、Etoileの辺を散歩してかへる。

十月二十八日（日曜）夏目氏、八時頃、ロンドンに向つて出発し去る。余等も亦、九時結束、十時、馬車二台をあつらへて、Gare du Nordに向ふ。十一時着。荷物を預け、同停車場前の一屋にて午餐。其高価なるに驚く。一時五十分、発車。平原の間を過ぎて、夜十時頃、Herbenthalに着す。こゝにて」（五十四頁）

税関の検査あり。同じく儀式的なりき。同停車場内に、料

理店あり。麦酒数杯を喫し、葡萄酒一瓶を購ひて汽車に入る。十二時、ケルンに着。同処にて車を乗り換ふ。こゝにいたりて、余と戸塚氏とは、一車に在り。藤代、稲垣氏とは、別の車に入る。夜に入りて雨降る。汽車Dortmundにいたる頃、停車場内に多数の人あり。余等を認めて支那人なりとし、頻に讒謗を極む。腹立てども詮方なし。暁、ブランドンブルクを過ぎて、ワイデルの池を眺めつ、九時頃、伯林、ポツダムの停車場に入る。藤代氏と同道。まづ、福原氏の寓を訪ふ。不在なり。よつて荷物をそこにあづけ、立花氏の寓にいたる。同氏、吉田静致氏とあり。同道して午餐を喫し、再び福原を訪ふ。不在。立花氏の寓にかへれば、近角常観氏もいたる。晩方、福原来る。ともに、（三字抹消）立花氏に依頼して、同氏の寓に湯沐を為す。」（五十五頁）

爽快比なし。今夜、立花氏の寓に宿す。（以上十月二十九日 月曜）

十月三十日（火曜）立花氏に拉せられて、藤代と二人、諸処の貸間を搜索す。余はゲルハルト街の一屋に空室を認め、来る一日、引移るべき旨を約してかへる。それより同道、

公使館にいたり、井上公使に面会。又書記官倉知氏其他にも面晤す。戸塚氏も、ついで来る。それより午餐を喫して、帰寓。藤代氏は、立花氏の筋向ひの一室を借りたるを以て、今夜は、同氏の寓に一泊する事に決す。

十月三十一日（水曜）立花、吉田、藤代三氏と、ライプチツヒ街よりウンテル・デン・リンデン街を散歩し、ライプチツヒ街に午餐し、洋服店にいたり、外套一領をあつらへ、独逸銀行にゆき、為換四百マークを受取る。帰途、立花氏に晚餐し、十時かへる。

十一月一日（木曜）立花、吉田、藤代三氏とチエルガルテンを散歩し、晩秋の風光を」（五十六頁）

賞す。落葉繽紛として雨の如し。獅子橋を過ぎて、運河に傍ひ、橋畔の一屋に午餐す。林海軍中佐、林博太郎等の諸氏に会す。それより歩いて寓にかへり、馬車を僦ひてゲルハルト街に引越す。薄暮、福原を訪ひ、立花氏（三字抹消）ともに祝。辰巳氏を訪ふ。同氏は、来る四日、倫敦に出発すべしといふ。ついで立花を訪ひ、藤代等五人にて晚餐を喫せんとし、Krügerにいたる。諸氏、余が寓に至りて、

談じて十一時にいたる。

十一月二日（金曜）藤代氏、呉氏とともに来る。よりて共に伯林大学にいたる。藤代氏、入学の手続をすまず。余は旅行券をわすれたるを以て、其手続をなす能はず。来る五日に来るべき旨を約してかへる。帰途、大学図書館等を一見し、某店に午餐す。立花、吉田二氏、亦来る。それよりオムニバスにて呉氏の寓を訪ひ、閑話少頃、街上にいで、ライプチツヒ街にいたり、有名なるLehnの勸工場に入りて、万年筆其他の」（五十七頁）

買物をなし、呉氏と分れ、鐵路馬車クリミナルゲリヒトにいたり、クルゲルに午餐す。福原氏、亦いたる。同店をいで、一同、藤代氏の寓にいたり、十時帰宅。今日のライプチ（七字抹消）

十一月三日（土曜）我が皇の天長節日、ことに麗なり。朝、ライプチツヒ大幸勇吉氏の書状と、和田万吉氏、九月十四日投函の表書とを領収す。今日より毎朝、牛乳半リットルを飲む事に決す。午後、藤代、立花、福原、吉田四氏、と公園（午後）から「公園」まで抹消）午前、立花氏来訪。と

もに公園内を歩して、ルイゼン記念碑の辺より戦勝路にいたり、戦勝塔に上る。夜、日本公使館にて夜会あり。晩景より之に赴く。来会者、百余名。半ば、大学出身の留学生、半ば、軍人なり。シヤンパンの美酒に酔ひて、十時過迄談笑。身の万里異郷に在るを忘る。」(五十八頁)

(五十九頁から六十一頁までは白紙)

Donald John Macdonald

Wester Bunloit Glenurquhart

Drumnadrochit

Invernesshire

Scotland」(百六頁)

(百七頁は白紙)

姉崎 Wilhelmienstr.49, Kiel

松本文 Kurfürstenstr.26 (二字抹消) 19

倉出 〃 125

西山 bei Frau Reizlaff Lutzowplatz 14II (正上へ付「Lutzowplatz」)

(百八頁、この頁は、インクの他に紫色鉛筆書き)

月 56 月  
 火 34  
 水 56 月  
 木 56 (「56」抹消) 火 月  
 金 34 (「35」と改) 火  
 土 七 水  
 金

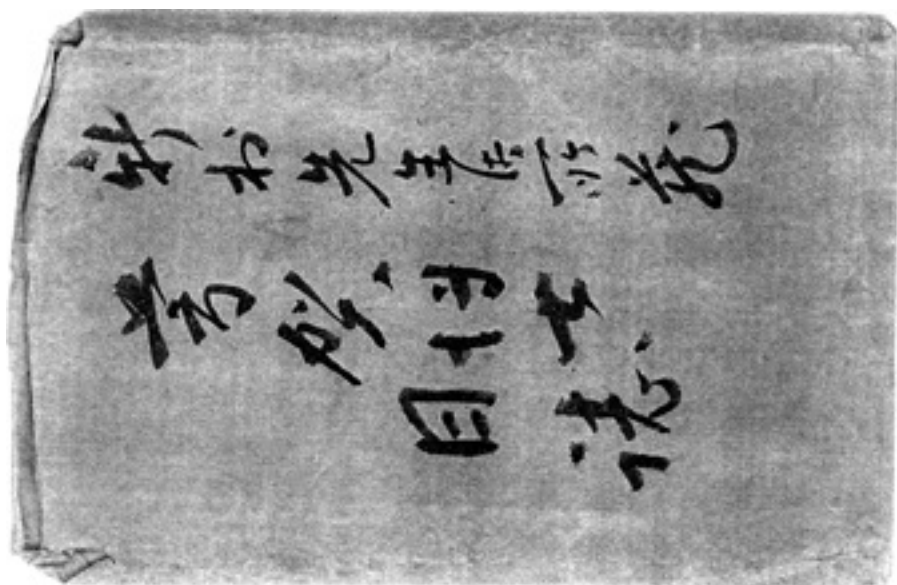
土」(百十頁、聴講予定の時

間割メモか)

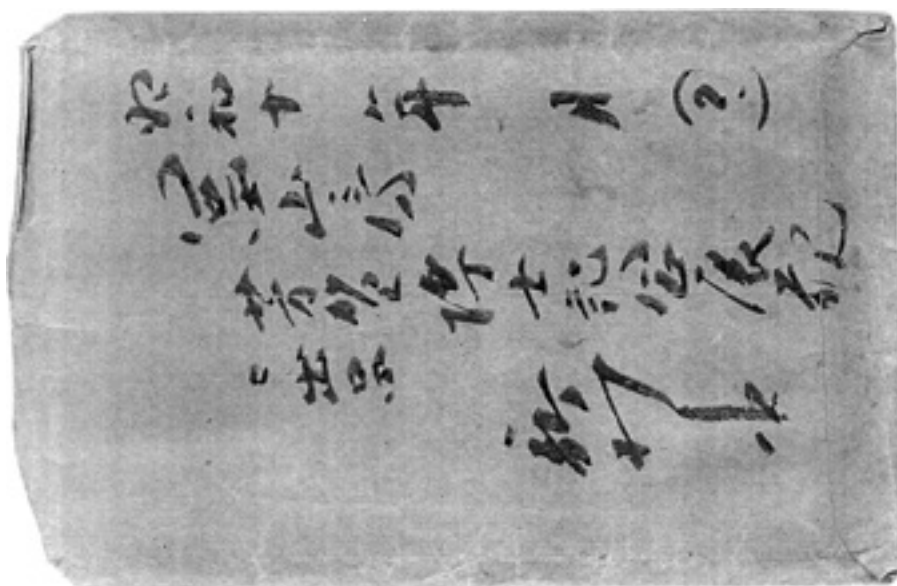
明治四十年三月、予独国ニ留学セントセシトキ、芳賀矢一博士其ノ遊学日誌ヲ予ニ示シ、携提シテ以テ参照ノ資ニ供スル所アラシム。其ノ後三十有余年、此ノ日誌、永ク予ノ手元ニ存スベキニアラザルヲ惟ヒ、東京帝国大学文学部国文学研究室ニ納メ、博士ノ記念トナサントス。

昭和十五年九月二十二日

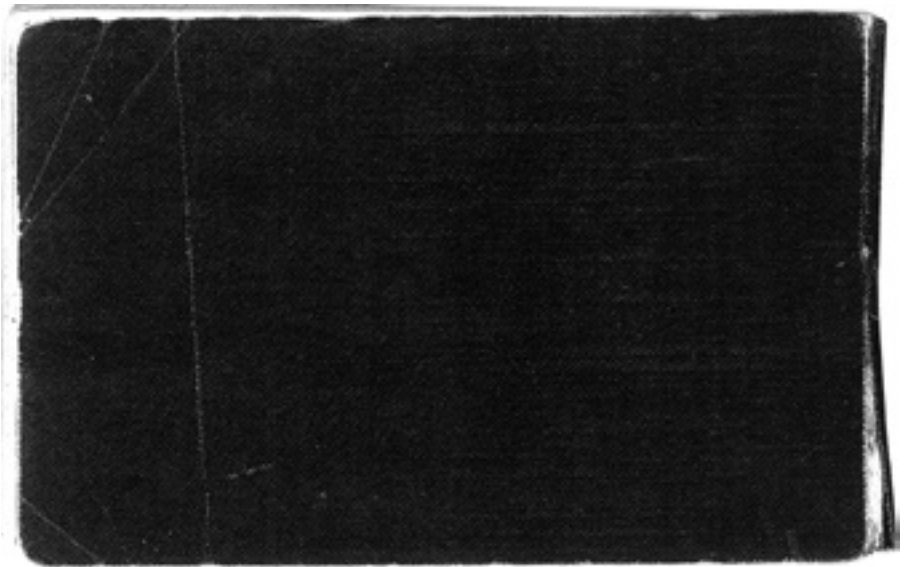
京都小山 新村出識」(後ろの遊紙の裏側、新村出筆、毛筆)



茶封筒の表



茶封筒の裏



前表紙

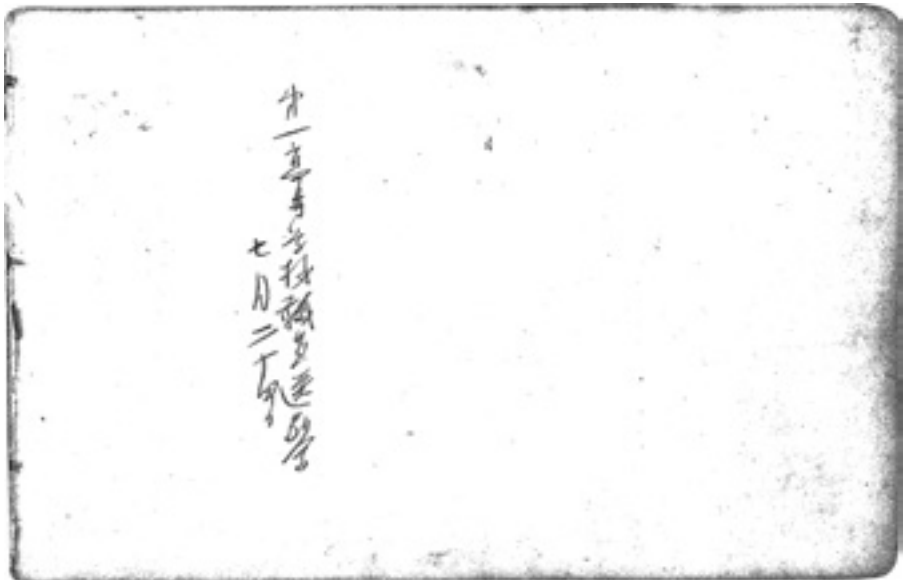


見返し





(前) 遊紙の表







九月十日(月曜) 瀬戸内海の最良なる船  
 休夜中ノ航遊一もろりノ曉起五時船  
 備整ニ臨ミ進出ス西岸ノ山麓一遊一  
 送 島嶼其間ニ然照シ暮景尚見ニ  
 多ク一沈橋ノ見伴一ノ小艇ヲ數艘  
 前後ニ往來サテ夜三時頃門司海峽  
 を通過ス西岸ノ山麓リク相送ニ見分  
 ノ比本國ニ相送リ至西一岸若水  
 右ノ馬國ナリ至門司アリ相新ト時一  
 一息(心)上下馬岡洲故所ノありと云々  
 傳ノ遺蹟アリト聞ク昨沖ノ子老一  
 一谷政磨ノ遺跡ヲ見今鹽浦ノ故蹟  
 在リト云々同ノ船路廿半航程ト傳位  
 ノ事古及テ名アリ昔ニ他好ノ凡也子  
 少子ノ月俯仰感既ニ幾多ノ時歴ニ新  
 一乘ノ此平 舟衝ノ路歴ニトシ  
 子一し 船官臨洋ニ入ルル後ノ橋ノ上迄  
 至堂坂舟ヲ下付山 船望坂ノ廣園在  
 今夜月明昨夜ノ如ク十一時より一燈  
 室ニ下  
 探原若趾七夫堂。鹽浦新地海衣宮。  
 一節原平並表記。如然夏草。且明中。  
 15 東幸記

九月十一日(火曜) 四時眠解キ會 船已ニ長崎  
 子(在)八時和答ヲ傳へて直ニ上陸シ一行  
 車ヲ踏むニ馬車籠車等凡ニ群鹿ノ跡  
 車官船本居下リ氏等七名ノ出身アリ  
 談話半時許 一行止 向陽亭ニ入リ湯休  
 ( 平茶ヲ喫サテ岸柳折高ノ料理 ) 人  
 傳甘味口ニ進サ三時同亭ヲ離シ六燈  
 止揚子リト馬車籠車等送リ來リ船籠  
 ノ小後船ヲ離シ人 本船ヨリト本船中盤毎時  
 出候ノ候アリ 本先堂舟來ニトシト云々  
 九時ヤリク出候サ船籠船ハ六ノ上海ヨリ入  
 來ヨリ出候ニトシト云々是等ノ一立ニ山小  
 イロノ出候セヨリト云々ハニト云々來上  
 之ニ送リ 出候セヨリト云々ハニト云々  
 至長ノ月明昨夜ノ如ク長崎山上ノ山ニ  
 白字無々讀むし今在ニト云々本堂  
 とありて持教社の海ノ堂



















船の代りに云々示布玉履ふ赤色の目立  
 つき、紅の著し馬車人子や銅色の  
 身多し、光澤あり七寸俵の思ふか  
 如き身、身中紫金色、口も重なるが下  
 中、身中、船五寸半、ありしを、校踏  
 する、身中、新上車、四寸、ありしを、校踏  
 する、身中、甲板の上、船の板、椅子、縦横  
 し、七、船、老、之、林、陰、と、意、大、座、十、寸、校  
 踏、雨、来、る。

九月二十七日(水曜)天曇り、細雨、時也  
 来り、時、午前、五、分、校、踏、者、と、見、る、船  
 長、回、り、か、く、近、く、見、る、は、理、一、さ、事、事、  
 と、西、舟、の、揚、子、を、と、り、し、新、上、校、踏、  
 子、事、已、し、二、百、二、十、六、寸、事、事、  
 今、日、事、事、熱、う、つ、代、噴、煙、室、に、煙  
 する、と、是、少、り、夜、風、雨、大、な、り、た、り、

九月二十七日(水曜)晴、船、心、中、に、在、り、  
 上、陸、と、校、踏、者、と、見、る、船、長、と、見、る、  
 二、分、り、し、此、の、事、事、の、意、思、は、新、上、校、踏、  
 子、事、事、の、事、事、の、事、事、の、事、事、  
 去、其、間、と、り、背、位、と、高、山、と、り、既、深、の

25

下、り、事、事、の、事、事、の、事、事、の、事、事、  
 ベ、レ、は、五、一、島、嶼、と、り、午、前、十、分、事、事、  
 船、や、り、校、踏、す、事、の、事、事、の、事、事、  
 借、原、甚、し、夜、風、大、に、起、り、浪、も、亦、  
 高、し、

九月二十八日(金曜)朝、果、地、の、晴、り、し、  
 海、浪、と、財、の、校、踏、り、し、百、分、事、事、  
 の、島、と、見、る、

若、り、事、事、の、事、事、の、事、事、  
 事、事、の、事、事、の、事、事、の、山、

十、寸、校、踏、者、風、雨、之、り、り、校、踏、浪、大、  
 高、し、

九月二十九日(土曜)今朝、晴、り、し、  
 夜、に、事、事、の、事、事、の、事、事、  
 中、夜、と、見、る、

九月三十日(日曜)今日、晴、り、し、風、強、し、  
 日、中、の、事、事、の、事、事、の、事、事、  
 事、事、の、事、事、の、事、事、の、事、事、  
 事、事、の、事、事、の、事、事、の、事、事、

十月一日(月曜)七、寸、甲板、と、事、事、の、事、事、  
 の、事、事、と、見、る、事、事、の、事、事、  
 事、事、の、事、事、の、事、事、  
 事、事、の、事、事、の、事、事、

26









新嘉坡一可見

亭々椰子直冬元 荷葉蓋池大似船  
熱國一分有秋意 蟲聲唧唧多  
幸百倍

コロンビアの印人の舟に乗船して来りては  
女の梳を看せり 船中下りては作りの  
はく其音我國の松屋の如し コロン  
ビアの地を使ふ船客を舟中へて見  
る人々待たせむか

十月六日(土曜)午後船が動揺ヤリ港  
し 船四対地大奥の江同ニ跳来  
りて見ゆるイナチ等一しとよ口正  
行の揚云コロンボ王去る事一千三百  
里程ありとありシコト島の島近こ  
りて一島ありて 蘇代氏  
作らむ 甘き島もふもふ  
モコエラの島もふんや  
蘇代夏目ニ氏と甲板工於ト十二  
時ヨリ  
十月七日(日曜)蘇代氏三氏と試二期  
蘇代の独註艦我王國の夜月色玲  
瓏全艦揺曳可 十五夜と當り  
秋思せ也  
十月八日(月曜)朝陸地を認むと程  
より一り 遙くアセの山を見ると在テ  
時頃アゲレ入る上人早く短船を  
在りて馳馬や卯明を踏馬を  
去りて東の吹郭舟を去らしし  
り少を丸の上陸せし十時頃  
七船室を下る今夜月明の如し



























Donald John Macdonald  
besides Bualoit Glenurquhart.  
Drumnaochit  
Inverness-shire  
Scotland

106

片時 Wilhelminenstr. 49. Kiel  
松本文 Kurfürstenstr. ~~19~~ 19.  
会志 " 125-  
田山 bei Frau Retzlaff Lützowplatz 14<sup>I</sup>

108

月 火 水 木 金 土	5-6	月 火 水 木 金 土	月 火 水 木 金 土
	3-4		
	5-6		
	<del>5-6</del>		
	<del>3-4</del> 3-5		

110

明治四十年三月予獨國：  
 留學セントセシトキ芳賀  
 矢一博士其ノ遊學日誌ヲ  
 予ニ示シ携提シテ以テ参照  
 ノ資ニ供スル所アキム其ノ後  
 三十有餘年此ノ日誌永ク  
 予ノ手元ニ存スベキニラザルヲ  
 惟ヒ東京帝國大學文學部  
 國文學研究室ニ納メ博士  
 ノ記念トナサントス

昭和五年九月三三  
 京都山 新井士識

(後) 遊紙の裏